

## ヒノヒカリの作期幅拡大による品質の安定と低コスト

農業研究センター 球磨農業研究所

### 研究のねらい

ヒノヒカリの栽培面積が増加する中で、田植が同一時期に偏った場合、収穫作業の競争や籾の乾燥作業が短期間に集中して、高品質米の生産や低コスト栽培上大きな問題がある。

このため、ヒノヒカリの特性を利用し田植時期を広めることで収穫幅拡大に伴う収量、品質、低コストの可能性等について検討した。

### 研究の成果

- (1) 収量：5月上旬から6月20日植の収量は、安定した収量が得られるが、7月上旬植では収量はやや低下する。
- (2) 品質：5月上旬から6月下旬の栽培では安定した品質が得られ、7月中旬以降では品質がやや低下する傾向にある。
- (3) 低コスト：6月5日～25日頃の田植に対し、5月上旬から6月下旬まで田植時期を広げることで3.6倍程度の田植ができ、コンバインの収穫面積も、2.3倍に拡大できる。
- (4) 低コスト2：田植機械のha当り作業料金は31,200円程度が13,900円に、コンバインの作業料金も、170,000円程度が79,000円に低下でき過剰投資が避けられる。
- (4) なお、田植、収穫の作業期間の延長によって、トラクタや乾燥施設の利用拡大と共に労働ピークの解消に役立ち、土地の計画的利用によって水稲、麦、野菜、タバコ、飼料作物等の輪作体系も容易になる。

### 普及上の留意点

- (1) ヒノヒカリは気象条件に左右されやすく、特に出穂後、降雨が続くと穂もち、紋枯病等にかかりやすいため、適期防除に努める。
- (2) ヒノヒカリは、倒伏にやや弱いため水管理の中干しは、早めから実施しやや強度の中干しをする。



写真 ヒノヒカリの生育中期における草姿

表 1 ヒノヒカリの田植え時期による収量、品質 (H4年度)

田植期	5/ 1	5/11	5/21	6/ 1	6/11	6/15	6/20	6/30	7/10
出穂期	7/31	8/ 7	8/31	8/19	8/24	8/23	8/26	8/29	9/ 6
成熟期	9/ 7	9/16	9/22	9/28	10/8	10/7	10/10	10/14	10/19
収量(kg)	55.1	55.8	55.2	51.7	51.9	54.9	52.2	46.4	38.4
収量比(%)	100	102	101	94	95	100	95	85	70
品質	2上	1中	1上	1上	1上	1上	1中	1中	1中

\*品質は検査等級 \*5/1と5/11植は、台風10号のために品質が低下した。

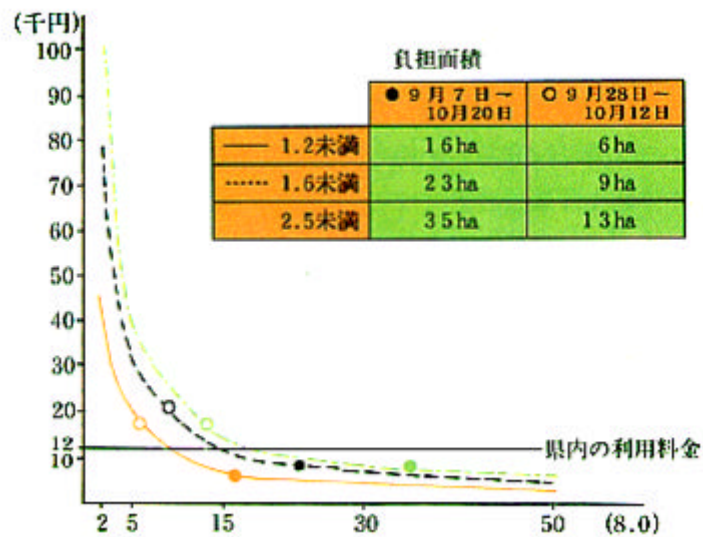


図 1 コンバインの年間作業面積とha当り作業経費